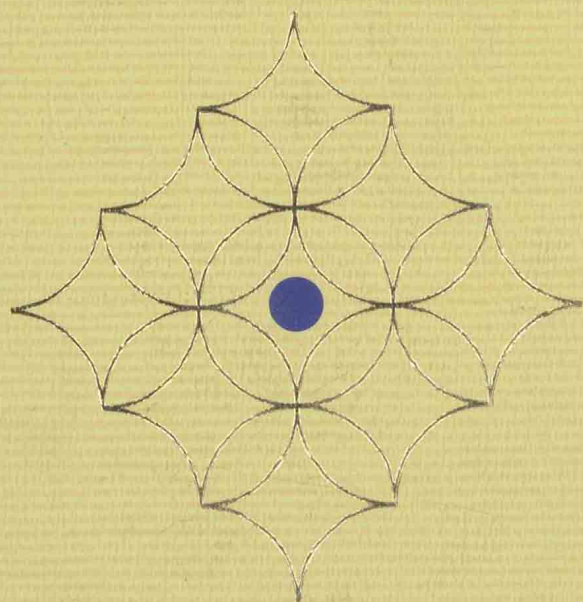




現代日本文學大系

96

文藝評論集

筑摩書房

現代日本文學大系 96

昭和四十八年七月十日

初版第一刷発行

文藝評論集

著者代表

本間久雄

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0395 (製品) 10096 (出版社) 4604

目次

巻頭写真

島村抱月篇

囚はれたる文芸

二九

文芸上の自然主義

三〇

自然主義の価値

三〇

相馬御風篇

文芸上主客両体の融会

三〇

自然主義論最後の試練

三〇

長谷川天溪篇

現実暴露の悲哀

三一

田中王堂篇

夏目漱石氏の『文芸の哲学的基礎』

を評す(抄)

三二

当来の文芸

三六

石橋忍月篇

舞姫

罪過論

綱島梁川篇

国民性と文学

予が見神の実験

高山樗牛篇

文明批評家としての文学者

美的生活を論ず

三三

三八

三九

四〇

四一

四五

四六

赤木桁平篇

「遊蕩文学」の撲滅

所謂「自然主義前派」に就て

本間久雄篇

民衆芸術の意義及び価値

千葉龜雄篇

新感覚派の誕生

小宮山明敏篇

新感覚派論、無意志前派時代を越

えて

現代作家の傾向に就いて

大宅壯一篇

文壇ギルドの解体期

文学史的空白時代

勝本清一郎篇

芸術運動に於ける前衛性と大衆性

芸術の国民的評価と世界的評価

瀬沼茂樹篇

心理文学の発展とその帰趨

前期自然主義文学

「民衆芸術論」前後

戸坂潤篇

文学・モラル及風俗

反動期における文学と哲学

窪川鶴次郎篇

農民作家論

芸術的価値と政治的価値

八

三

一〇一

一〇六

一一〇

一一五

一二三

一二五

一三

一四〇

一四五

一五五

一六三

一七一

一七五

一八三

一八七

山室靜篇

現在に於ける文学の立場

一九六

デカダンスの文学

一九九

生命感の歪み

二〇四

岩上順一篇

文学批評の方法論

二二三

新浪漫主義の相貌

二二六

神西清篇

詩と小説のあひだ

二三三

佐々木基一篇

フィクションについて

二三七

原民喜の自殺をめぐる

二三四

現代芸術はどうなるか

二四〇

浅見淵篇

「細雪」の世界

二四七

芸術主義の頹廢について

二五三

高橋義孝篇

鷗外の文体

二五五

マルクス主義文学理論批判

二六四

谷川雁篇

原点が存在する

二七四

大岡信篇

詩の条件

二七五

戦争前夜のモダニズム

二八六

抒情の行方

二八六

服部達篇

われらにとって美は存在するか

二八八

十返肇篇

「文壇」崩壊論

大ロマンの可能性

高橋和巳篇

文学の責任

篠田一士篇

文学の変容のために

奥野健男篇

純文学は可能か

文学は死滅するか

佐伯彰一篇

死とエロスと

〔付録〕

解説

年譜

瀬沼茂樹 三九

三六

三五

三九

三六

三七五

三七

文藝評論集

石橋忍月篇

舞姫

鷗外漁史の「舞姫」が国民之友新年附録中に就て第一の傑作たるは世人の許す所なり。之が賛評をなしたるもの少しとせず。然れども未だ其瑕瑾を發きたるものは之れ無きが如し。予は二三不審の廉を挙げて著者其人に質問せんと欲す。

「舞姫」の意匠は恋愛と功名と両立せざる人生の境遇にして、此境遇に処せしむるに小心なる臆病なる慈悲心ある——勇氣なく独立心に乏しき一個の人物を以てし、以て此の地位と彼の境遇との關係を發揮したるものなり。故に「舞姫」を批評せんと欲せば先づ其人物（太田豊太郎）と境遇との關係を精査するを必要となす。抑も太田なるものは恋愛と功名と両立せざる場合に際して断然戀愛を捨て功名を採るの勇氣あるものなるや。曰く否な。彼は小心的臆病的の人物なり。彼の性質は寧ろ謹直慈悲の傾向あり。理に於て彼は恩愛の情に切なる者あり。「処女たる事」(Jungfräulichkeit)を重すべきものなり。夫れ此「ユングフロイリヒカイト」は人間界の清潔、温和、美妙を支配する唯一の重宝なり。故に姦雄の権略的の性質を備ふるものにあらずれば之を輕侮し之を棄却せざるなり（例へばナポレオンがヨーゼフヒンを

棄つるが如し）。否な之を輕侮し之を棄却する程の無神的の苛刻は胆大にして且つ冷淡の偽人物に非ざれば之を作すこと能はざる為なり。今本篇の主人公太田なるものは可憐の舞姫と恩愛の情緒を断てり。無辜の舞姫に残忍苛刻を加へたり。彼を玩弄し彼を狂亂せしめ、終に彼をして精神的に殺したり。而して今其人物の性質を見るに小心翼々たる者なり。慈悲に深く恩愛の情に切なる者なり。「ユングフロイリヒカイト」の尊重すべきを知る者なり。果して然らば「真心の行為は性質の反照なり」と云へる確言を虚妄となすにあらざる以上は太田の行為——即ちエリスを棄てて帰東するの一事は人物と境遇と行為との關係支離滅裂なるものと謂はざる可からず。之を要するに著者は太田をして戀愛を捨てて功名を取らしめたり。然れども予は彼が応に功名を捨てて戀愛を取るべきものたることを確信す。ゲエテール少壯なるに當つて一二の悲哀戯曲を作るや、迷夢弱病の感情を元とし、劇烈鬱勃の行為を描き、其主人公は概ね薄志弱行なりし故に、メルクは彼を諷めて曰く、此の如き精氣なく誠心なき汚穢なる愚物は将来決つて写す勿れ、此の如きことは何人と雖も為し能ふなりと。予はメルクの評言を以て全く至当なりとは言はず。又「舞姫」の主人公を以て愚物なりと謂はず。然れども其主人公が薄志弱行にして精氣なく誠心なく随つて感情の健全ならざるは予が本篇の爲めに惜む所なり。何をか感情と云ふ。曰く性情の動作にして意思——考察と共に詩術の要素を形くるもの即ち是なり。蓋し著者は詩境と人境との區別あるを知つて、之を実行するに當つては終に區別あるを忘れたる者なり。

著者は主人公の人物を説明するに於て頗る前後矛盾の筆を用ひたり。請ふその所以を挙げむ。

我心はかの合歓といふ木の葉に似て物ふるれば縮みて避けんとす我心は臆病なり我心は処女に似たり余が幼き頃より長者の教を守りて学の道をたどりしも仕への道を歩みしも皆な勇氣ありて能くしたるにあらず云々（四頁下段）

是れ著者が明かに太田の人物を明言したるものなり。然るに著者は

後に至りて之と反対の言をなしたり。

余は我身一つの進退につきても又た我身に係らぬ他人の事につきても果斷ありと自ら心に誇りしが云々(一四頁上段)

余は守る所を失はじと思ひて己れに敵するものには抗抵すれども友

に對して云々(一二頁上段)

此果斷と云ひ抗抵と云ひ、總て前提の「物ふるれば縮みて避けん」とす我心は臆病なり云々の文字と相撞着して并行する能はざる者なり。是れ著者の粗忽に非ずして何ぞや。

次に本篇二頁下段「余は幼なきころより嚴重なる家庭の教へを受け云々」より以下六十余行は殆んど無用の文字なり。何となれば本篇の主眼は太田其人の履歴に在らずして戀愛と功名との相関に在ればなり。彼が生立の状況洋行の源因就学の有様を描きたりとて本篇に幾千の光彩を増すや、本篇に幾千の關係あるや、予は毫も之が必要を見ざるなり。

予は客冬「舞姫」と云へる表題を新聞の広告に見て思へらく、是れ引手数多の女俳優(例へばもしや艸紙の雲野通路の如き)ならんと。

然るに今本篇に接すれば其所謂舞姫は文盲癡騷にして識見なき志操なき一婦人にてありし。是れ失望の第一なり(失望するは失望者の無理か?)。而して本篇の主とする所は太田の懺悔に在りて、舞姫は實に此懺悔によりて生じたる陪賓なり。然るに本篇題して舞姫と云ふ。豈に不穩当の表題にあらずや。本篇一四頁上段に曰く「先に友の勧めしときは大臣の信用は屋上の禽の如くなりしが今は稍やこれを得たるかと思はるゝ云々」と。ソモ屋上の禽とは如何なる意味を有するや、予は之を解するに苦む。独乙の諺に曰く「屋上の鳩は手中の雀に如かず」と。著者の屋上の禽とは此諺の屋上の鳩を意味するもの歟。果して然らば少しく無理の熟語と謂はざる可からず。何となれば独乙の諺は日本人に不案内なればなり。況んや「屋上の鳩」の語は「手中の雀」と云へる語を俟つて意味あるものに於てをや。蓋し此の如き些細を責むるも全く本篇が秀逸の傑作なれば也。

本篇一〇頁上段に「表てのみは一面に氷りて朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり云々」の語あるを以つて人或は独乙は温かき生血を有する動物が凍死する程寒威凜烈の国なるやと疑ふものあり。然れども独乙には實際寒威其者よりも寧ろ水雪の爲めに飼料を求むる能はざるが爲めに飢死する小動物ありと聞く。著者の冬期を景状せしは増飾の虚言にあらずして實際なり。故に一言以つて著者の爲めに弁護するものなり。

依田学海先生国民之友の附録を批して曰く、「舞姫」は殘刻に終り、「拈華微笑」は失望に終り、「破魔弓」は流血に終り、「醉沈香」は嘆息に終る。嗚呼近世の小説は歡天喜地愉快を寫さずして、總て悲哀を以て終らざる可からざる乎と。小説の真味豈に常に消極的の運命を寫すのみならんや。学海翁をして此言をなさしむ、嗚呼果して誰の罪ぞ(半之丞曰く、此は決して「舞姫」を非難するに非ず)。

予は前述の如く「舞姫」に對して妄評を加ふと雖も兎に角本篇は稀有の好著なり。若し小説界の明治廿一年以前を春のや支配の時代となし、廿二年を北邙、美妙、紅葉支配の時代となさば、明治廿三年は恐くは隅外、露伴二氏支配の時代ならん。予は信ず、本年の文壇に於て霸權を握るものは此二氏に在ることを。

(明治二十三年二月)

罪過論

罪過の語はアリストテレスが、之を悲哀戯曲論中に用ひしより起原せるものにして、独逸語の所謂「シウルド」是なり。日本語に之を重訳して罪過と謂ふは稍々穩当ならざるが如しと雖も、世にアイデアル、リアルを訳して理想的、実写的とさへ言ふことあれば、是れ亦差して咎むべきにあらず。

吾人をして若し罪過の定義を下さしめば、簡明に左の如く謂はんと欲す。曰く、

罪過とは悲哀戯曲中の人物を悲惨の境界に淪落せしむる動力（源因）なり

と。此動力（源因）は即ち術語の罪過にして、世俗の所謂過失及び刑法の所謂犯罪等と混同すべからず。例之ば茲に曲中の人物が数奇不過不幸慘憺の境界に終ることありと仮定せよ。其境界に迫るまでには其間必ずやソレ相応の動力なかるべからず。語を交へて之を言へば鬭争、鬱屈、不平、短氣、迷想、剛直、高踏、逆俗等ありて数奇不遇不幸慘憺の境界に誘ふに足る源因なかるべからず。罪過は即ち結果に対する源因を言ふなり、末路に対する伏線を言ふなり。此伏線此源因は如何にして發表せしむべきや。言ふまでもなく主人公其人と客観的の氣運との争ひを写すに在り。此争ひの爲めに主人公知らず／＼自然の法則に背反することもあるべし。国家の秩序に抵触することもあるべし。蹉跎苦吟自己の驕足を伸ばし能はざることもあるべし。零落不平素志を達せずして終に道德上世に容れられざる人となることもあるべし。憤懣短慮終に自己の名譽を墜すこともあるべし。會つて之を争

ひしが爲めにワルレンスタインは悲苦の境界に沈淪したり。マクベスは間接に道德に抵触したる所業をしたり。天神記の松王は我愛子を殺したり。娘節用の小三は義利の刀に斃れたり。信長の本能寺に弑せらるゝ、光秀の小栗栖に刺さるゝ、義貞の敗績に於ける、義経の東走到に於ける、皆罪過なくんばあらず。吾人は断言せんと欲す、曰く、世に罪過なくして不幸の末路に終るものは之れなしと。人或は曰はん、キリストは罪過なくして無慘の死を遂げたりと。然れども吾人詩學的の眼を以つて之を視るときは、キリストと雖も明白なる罪過あるなり。彼はユダヤ人の氣風習慣に逆ひ、時俗に投ぜざる、時人の信服を買ふ能はざる説を吐けり。是れ彼が無慘の死に終りし動力なり、原因なり、伏線なり。別言すれば彼は術語の罪過を犯せしものなり。孔子の饑餓に苦められしことあるも、孟子が轆轤不遇に終りしも、帰する所は同一理なり。

吾人が悲哀戯曲に対するの意見此の如し。若し世間に罪過は悲哀戯曲に不必要なりと言ふ者あらば、吾人は其暴論に驚かずんばあらず。又罪過は戯曲のみにあるべきものにして決して小説にあるべからずと言ふ者あらば、吾人は別論として猶ほ其誤謬を駁せんと欲するなり。鷗外漁史は會つてS・S・S・S・社を代表して「しがらみ艸紙」の本領を論ぜしことあり。中に言へるあり、曰く、

伝奇の精髓を論じてアリストテレスの罪過論を唯一の規則とするは既に偏聴の誚を免れず、況んやこれを小説に応用せんとするをや云々と。又医学士山口寅太郎氏も「しがらみ艸紙」第四号の舞姫評中に言へるあり、曰く、

忍月居士がアリストテレスの罪過説を引て小説を論ずるが如きものは豈其正を得たるものならんや

云々と。吾人は先づ順を追ふて二氏の論の当否を判定せんと欲す。二氏共に罪過論は偏曲なり、又は小説に応用すべからずと断定せしみにして、毫も其理由を言はず。素より他を論議するのついでに此言を附加せしものなれば、二氏も冗長をさけて其理由を言はざりしものな

らん。然れども吾人は其理由を聞かずんば其説に承服する能ざるなり。素より戯曲には種々の規則あり、罪過を以つて唯一の規則となすは不可なるべしと雖も、之が爲めに罪過は不用なりと言ふらば亦た大に不可なるが如し。何となれば人物は動力（原因）なくして偶然不幸悲惨の境界に陥るものなければなり。歴史家が偶然の出来事は世に存在せずと言ふも是れ吾人と同一の意見に出づるものならん。故に吾人は罪過を以つて重要な戯曲規則のみに数へんと欲す。

戯曲は吾に不幸悲惨に終るもののみならず、又素志を全うして幸福嬉樂に終る者もあり。然るにアリストテレスは何が故に只罪過のみを説いて歎喜戯曲の「歎喜に終る原因」に就て説くことなかりしや。是れ大なる由縁あり。當時希臘に於ては悲哀戯曲のみを貴重し、トラゲヂーと言へばあらゆる戯曲の別名の如くなりて、悲哀戯曲外に戯曲なしと思惟するの傾向ありたり。故にアリストテレスが戯曲論を立つるも専ら悲哀戯曲に就て言へるなり。若し彼をして歎喜戯曲、通常戯曲等も悲哀戯曲と同じく尊重せらるゝ現代に在らしめば、彼は決つて悲哀戯曲のみに通用する「罪過」の語を用ひずして、必ず一般に通用する他語を用ひしに相違なし。故に近世の詩學家は罪過の語の代りに衝突「コンフリクト」の語を用ふ。而して曰ふ、トラゲヂーの出来事は人物が其力量識見徳行の他に超抜するにも係はず、不幸の末路に終へしむる所の衝突を有し、コメヂーの出来事は素志を全うし幸福嬉樂の境に赴かしむる所の衝突を有すと。ア、世に人物に對する衝突なきの出来事ある乎。若し之れありとせば、ソは最早出来事とは稱すべからざるなり。是を以つて之を視れば、罪過も衝突も行為結果の動力を意味するに至つては同一なり。只意義に広狭の差あるのみ。されば罪過説を排斥するものは衝突説をも排斥するものなり。アリストテレスの罪過を広意に敷衍すれば即ち結果に對する原因なり、末路に對する伏線なり（復た其不幸に終ると幸福に終るとを問はず）。試みに鵜外漁史に問はん、漁史は結果のみを寫して原因を寫さざる戯曲を稱して猶ほ良好なるものと謂ふ乎、原因に注目する者を稱して猶

は偏聽の語を免れざるものとなす乎。

又翻つて小説を見るに、苟くも小説の名を下し得べき小説は如何なるものと雖も、悉く人物の意思と氣質とに出づる行為、及び其結果より成立せざるはなし。人物の一枯一榮一第一達は總て其行為の結果なり。故に行為は結果に對する原因となるなり。禍に罹るも福を招くも其源を尋ねれば、行為は明然之が因をなす。別言すれば結果は原因の写影たるに外ならず。此原因は即ち広意に於ける罪過と同一意義なり。（以下に用ふる罪過の語は衝突と同一なりと思ひ玉へ）世に偶然の出来事なし、豈に罪過なきの結果あらんや。手を相場に下して一攫千金の利を得るも、志士仁人が不幸奇なることあるも、悪人榮えて善人亡ぶることあるも、尊氏が征夷大將軍となるも、正成が湊川に戦死するも、總て何処にか罪過なくんばあらず。罪過なくんば結果なし。結果なくんば行為なし。行為なくんば意思なし氣質なし。意思なく氣質なくんば既に人物なし。人物なくして誰か小説を作るを得ん。鵜外、山口の二學士が小説に罪過説を応用すべからずと云ふは、横から見ても縦から見ても解すべからざる謬見と謂はざるを得ず。何となれば二學士は行為なき、人物なきの小説を作れと言ふものと一般なればなり。否らざれば二氏は木偶泥塑を以つて完全なる小説を作れと命ずる者と一般なり。吾人は二氏が難きを人に責るの酷なるに驚く。

二氏は如何にして此の如き謬見を抱きしや。吾人熟々二氏の意の在る処を察して稍々其由来を知るを得たり。蓋し二氏は罪過説に拘泥する時は命数戯曲、命数小説の弊に陥るを憂ふる者ならん。何となれば罪過なる者は主人公其人と運命（運命の極弊は命数）との争ひを以て發表する者なればなり。若し果して然らば二氏は運命を適当に解釈するを知らざる者なり。運命とは神意に出るものにもあらず、天命にもあらず、怪異にもあらず。古昔希臘人は以て爲らく、人智の得て思議すべからざる者は是れ則ち運命なりと。故に英雄豪傑の不幸に淪落するは、其人の心、之を然らしむるにはあらずして、皆な天命神意に出づるものなりと。又、ゾホクレス、タイリビデス等の戯曲は多く此傾き

あるが如し。思ふに二氏が運命を解釈するは是と同一ならん。然れども是れ古昔陳腐の解にして近世詩学家の採らざる所なり。吾人は運命を以て「都て人の意思と氣質とに出づる行為の結果なり」と解釈するものなり。シエクスピヤーの傑作も近松の傑作も皆な此解釈に基くが如し。又レッシングの「ガロッチー」シルレルの「ワルレンスタイン」も亦た皆な然らざるはなし。是を以て知る、縦令罪過に拘泥するも、運命の解釈さへ誤ることなければ、決つて命数の弊に陥るの憂なきを。

近く例を探らんに、春のやの妹と背鏡、細君、美妙齋の胡蝶、紅葉の色懺悔及び鷗外の舞姫等皆な罪過あるなり。然れども皆な小説たるの体裁を失はず。只其間に彼此優劣の差あるは、一に罪過の発生、成長の光景を写すに巧拙あるが故なり。要するに罪過なきの小説は小説にあらざるなり。罪過なきの戯曲は戯曲にあらざるなり。罪過の発生、成長を巧みに写すこと能はざるものは、拙劣の作者なり。

ア、罪過が戯曲、小説に於ける地位、斯の如く重要なり。敢て罪過論を聳して世上の非罪過論者に質す。

(明治二十三年四月一、二、三日)

綱島梁川篇

国民性と文学

今日の文学、就中小説に對する世間の要求の主なるものを挙げれば、現社会に密接して時事時潮を描けるといふもの其の一にして、国民性を描写して国民的性情の満足を与へよといふもの其の二なり。前者は姑く措く、後者の要求に対しては吾人頗る感ふ。則ち問うて曰はく、国民性とは何ぞや、国民的性情の満足とは何ぞや、そも／＼又此の要求に是認せらるべき点ありとせば、そは果して如何程の意味にて是認せらるべきかと。

漫然国民性を描けといふ、而も其の意義其の根柢を繹ね来たれば頗る渾たるものあり。之れを解して、

一、国民性の一部の影を描けとの義とすべきか、
二、国民性の全部の影を描けとの義とすべきか、

三、国民の美処もしくは美なる特質を描けとの義とすべきか、
所謂国民性を描けとの要求にして以上の三解の外に出でずとせば、是等は果して如何なる意義を有するぞ。吾人をして少しく之れを撿覈する所あらしめよ。

試みに第一解に従はば如何。之れを描写せよと要求するまでもなく

此の意味に於ての国民性は皆多少描きつゝありと言はざるべからざるにあらずや。描いて尽くさざる所あるは、(尚後に説くが如き他の一面の理由もあれど)、其の主観的なるが為め、もしくは其の抒情的なるが為めにあらずや。蓋し苟も我が国土に脚を托するものにして誰れか能く国民性の圈外に逸出するものあらんや。彼等は意識を役せずして皆国民性の一部を描くべきものにあらずや。如何ばかり主観的なる作家といふとも、作家自身にして籍を一国に有する限りは其詩材もしくは主題の何たるに拘らず、其の作の氣脉は多少国民性に触れざらんと欲するも得べからざるにはあらざるか。作家にして日本国民たる限りは一種のコスモポリタンを取り、又は一外人を挾びて其の詩材となすとも、全く国民性の形跡を脱却し得ざるは之れをゲートが『イフイゲニア』の例に徴するも明かなるにあらずや。否シエークスピアの客観的なるだに尚且つ全く当代の英國国民性を脱却し得ざりしにあらずや。されば此の意味にては、柳浪も、鏡花も、天外も、多少厚薄の度こそ異なれ、皆国民性を描きつゝありといふを事実とすべきにあらずや。吾人は国民性の一膜を被らざるの作家、随うて又さる意味の文学あることを信ずる能はず。要するに此の意味にての国民性を言ふは殆ど無意義なり、重語なり。吾人は寧ろ円満なる客観詩を得んと欲するの余りに、一時一処の国民性を擺脫せよと要求するの(其の要求の当否は別論として)之れを描けと要求するの殆ど無意味なる勝りて新意味あるを認めずばあらざる也。然らば

第二解に従はば如何。国民性の一部の影を描けといふの空語たるは論なけれど、其の全部の影を描けと言ふの意となさば、おのづから一種の根柢あるに似たり。主観的なる今の作家に向つて国民性全躰の影を描破せよと言ふ、吾人は必しもこの要求を非とせず、唯々今の作物に国民性全躰の影の現れざるを見て作家自身にのみ其の罪を嫁すべきか、或は(特別な時勢の結果として)国民性全分の影其のものゝ頗る模糊として捉らへがたきものあるにも因せざるか、(後に論じたるが如く)若し後者に一面の理ありとせば、漫に此の境域を明らめずし

て国民性全分の影を描けと要求するの果して当を得たりといふを得べきか。然らば、更に

第三解に従ふとせんか。疑ふらくは国民性を唱ふる一派の正意は此の点にはあらざるか。其の意に以為へらく、国民性即ち国民の美質を描かざる小説は国民の性情を満足せしめざる小説なり、随うてまた国民と為すなきの文学なりと(『太陽』第七号「文芸界」)「小説革新の時機」(参照)。此に問ふべきは、何が故に小説は国民の美質をのみ描かざるべからざるかといふ事なり。国民の短処、醜処は(吾人はこれなしと断するの理由を認むる能はず)何故に以て詩材と為すべからざるか。苟も美の約束に乖かざる限りは美醜長短皆以て詩中の内容となすを得べきにあらざるか。弁ずるものは曰はく、詩材は必しも国民の美質に限れりとは言はず、唯々しかするにあらざれば以て国民の性情を満足せしむる、能はざるが故のみと、されど吾人は尚問ふことを得べし、論者は如何なる見地より、国民の美質をのみ描きたる作にあらざれば以て国民の性情を満足せしむる能はずと断じ得るぞと。国民の醜短短処を描きたる作は何故に国民の性情を満足せしむる能はざるか。国民の醜短短処または是れ国民性の一部にはあらざるか。同じく国民性を描きながら、一は其の美所なるが故に国民の性情に満足を与へ、一は其の醜所なるが故に之れに満足を与へずといふの理由は如何に之れを解すべき。国民自身にして其の「我」に媚び、一種の実情を挿んで之れに對すれば知らず、苟も美術として之れを賞翫するにあたり、其の美処を描きたると醜処を描きたるとを問ふの必要あるか。むしろ美醜両面を併写せる真個の「我」を描写したる底の作物にこそ甚深の満足を感じすべきにはあらざるか。仮りに歩を譲りて国民の美質を描きたる作にあらずば以て国民の性情を満足せしむるあたはずとせんも、文学には尚人としての通情に訴ふる一面(かりに抽象して言へば)あるを見る。かるが故に此に一コスモポリタン或は一外人を主題とせる一作物ありて其は主題の自然の結果として所謂国民性に触れたところ著明ならず(全く之れに触れずとは言ふ能はず)随うて仮りに国民として

の意識の満足を此に見るを得ずとせんも、若し件の作にして或、易なる人生の消息を描きたるの側ありとせば、吾人は之れに一種幽奥なる性情の満足を感じざるべきか。されど此くの如き作は到底国民としての意識を満足せしむる能はざるが故に国民と為すなきの文学なりと言はんか、謂ふところ国民は普通の新聞的読者の一団を指せるの語か、言ひ換ふれば、一種の実感もしくは卑俗なる好尚を以て文学に對する、国民の意なるか、然らざれば国民としての意識を満足せしむる能はずの語得て解すべきにあらざるや。思ふに詩歌に性情の満足をいふの意は唯だ作中に現れたる詩的正義に對する満足に關してのみ言ひ得らるべき事にはあらざるか、詩的正義にあらば、必ずしも ideal hero を主人公とするの要なきにはあらざるか。吾人は国民性の美処をのみ描けといふ論拠に對して疑ひなきを得ざるなり。

更に惑ふ、謂ふところ国民性とは何ぞやと。言ひ換ふれば、我が国民に普遍なる特質(而して此かる特質は要求するまでもなく作家が日本人なる限り、其の描写の方面を異にせるに拘らず、之れに触れざる作家なかるべき所以は普遍といふ語にも著くまた上文既に論じたる所にも著し)とは果して如何なるものなるかと。論者或は之れに答ふるに左の特質を以てせん曰はく、

日本国民は快活樂天の国民なり、

日本国民は尚武任侠の国民なり、

日本国民は最も國家の運命を懸念するの国民なり、

日本国民は最も道義的情緒に富める國民なり、

日本國民は忠孝義勇を人道の大本となす國民なり、

日本國民は家系の繼紹を重ずる國民なり、云々

と。好し、此に列挙せる特質は果して日本國民の普遍なる特質なりと言ふを得べきか。論者は快活樂天を以て國民の特質となす、されど此は特り日本國民が先天的特質なりと言ふを得べきか、古希臘國民の如きも、また此の質を有し、且つ一層明に此の特質を有せりしにはあらざるか。此には仮りに之れを問ふの要なしとして、更に疑ふべき

は、日本国民は果して真に快活樂天なる国民なるかといふことは是れ也。一面この特性あるを許すとせんも、他面悲哀厭世の特質を看過するを得べきか。祇園精舎の鐘の音に人生の無常を觀ぜし当年の鎌倉武士、足利時代の国民は如何さまにか之れを解すべき。『平家物語』もしくは『方丈記』等は以て日本国民の産物となすべからざるか。吾人は疑ひなきを得ざる也。然らば尚武任俠は如何。吾人は此にも前と同様な疑ひを提起し得べし、則ち尚武任俠はひとり日本国民の特質なりといふを得べきかと。かの歐洲中古に於ける義俠勇士の武士氣質は全く之れと性質を異にせりと云ふを得べきか。義俠といひ尚武といふが如きは日本国民固有の特性といはんよりも、寧ろ封建制度其のものに必隨し來たる一種の現象と言ふの當たれるにはあらざるか、更に國家の運命を懸念するを以て日本国民の特質なりと言はんか、國家の運命を懸念するもの特り日本国民にのみ限れるの事なるか、之れを以て日本國民の特質となすは余りに漠たるの感なきを得るか、道義的情緒に富めりといふを以て之れに答へんか、これ將た特に標して日本國民の特質なりと言ふほどに具象的ならざるを如何せん。終りに忠孝といひ、家系の繼紹といふ、此の二事は以て日本國民の特質を代表せしめ得べきが如し。中にも忠君の徳の如きは万国に其の倫を見ざる國民の美質なりと言ふを得べし。(孝徳の發達はむしろ著るしく支那に見ることを得べけれど)さはれ忠孝や、家系の繼紹や、是等は果して日本國民の不易の若しくは先天的特質なりと言ふを得べきか、少なくとも英國民性を Positivistic といひ實際的といふほどの意味にて之れを日本國民の特質なりと言ひ得べきか。是等は寧ろ半ばは歴史的、進化的結果なりと言ふを得べからざるか。かりに是等の疑ひを排斥する十分の根拠ありとするも、所謂忠孝、所謂任俠、所謂家系の繼紹は、半ば過去の理想もしくは特質にはあらざるか。然らば論者が國民性を描けといふ意を解して、

過去の國民性もしくは理想を描けとの意となさば如何。此の一解は以て前の三解を補ふには足らざるか。されど吾人は疑ふ、何が故に過

去の國民性もしくは理想を今の作家に要求する必要あるかと、過去の理想を描きたる作を見んと欲せば馬琴に帰れ、春水に帰れ、種彦に帰れ、もしくは又た巢林子、西鶴の作に帰れ。之れを以て今の作家に擬するは屋上屋を架するの愚を演ずるものにはあらざるか。今の作家をして彼の中古派の覆轍を蹈ましめんと欲するものにあらざるか。よしや忠孝もしくは義俠を以て國民の特質なりとするも、吾人の見んと欲する所は過去の所謂忠孝にあらざりて今日の忠孝にあらざるか。過去の所謂家系問題にあらざりて、今日の家系問題にあらざるか。換言すれば、吾人は明治二十六世紀の風潮の爲に若干か化醇せられたる忠孝及び家系問題を見んことを欲するにあらざるか。夫れ忠孝といひ義俠といふ、其の形式的方面は古今不易なりとするも、其の意義内容は不斷に變遷し不斷に發展す。所謂道徳的理想の不斷の發達は之れを希臘の四大徳の例に徴するも明かなるにあらざるか。さすれば吾人の今日の作家に要求する國民的特質なるものは件の發達し化醇せられたる特質にはあらざるか。而して此かる特質(理想)は今や甚しき化醇の途次にありて未だ劃然たる定質を鑄成するに至らざるにはあらざるか、言ひ換ふれば今日の社会は未だ一定せる國民的新特色を有せずといふを事実とすべきにはあらざるか。試みに思へ、所謂忠孝、所謂家系の繼紹等の過去の理想は、到る処に新思潮と矛盾し衝突しつゝあるにあらずや。此等の理想は今や其の意義の上に多大なる變化を享けつゝあるにあらずや。若し之れを事実とせば、一派論者の要求は當を得たりと言ふを得べきか。換言すれば未だ定着したる理想を有せざる今の社会及び文壇に向つて、漫に方今の國民的特質を描けと言ふ、其の結果は小細工を以て糊塗せる過去の理想若しくは淺薄なる現時の俗人的理想を描写せしむるにとゞまるの悔なきを得るか。或は浪六もしくは弦斎一流の小説家が今日に歡迎せらるゝの因を其が國民的特質を描けるの点に帰するものあり、されど浪六、弦斎の作を読み國民的性情の満足を感じるの徒は淺薄なる俗人的理想を悦ぶの徒か、然らざれば過去の理想に満足するの徒にはあらざるか。何となれば其の作中に現